

小平における土地利用の特色として、全体の中心がないことがあげられるが、これは、古くからの中心地がないことと、市全体から交通の便の良い駅がないことなどが原因である。地価の上昇などに伴ない、交通の便の悪い地区での宅地化がすすんでおり、また街道沿いの農地を農家が手離さないため、スプロール現象が著しい。昭和40年代後半から、人口増加の傾向は沈静したが、住宅の建設は引き続きさかんである。昭和46年に立案された「小平市長期総合計画基本計画」は、適正な人口密度と土地利用形態を持つ住宅都市を目標としており、様々な施策が行なわれているが、農業的土地利用と都市的土地利用の理想的な配置に関しては、農業・商工業だけではなく、地価・交通などとの関係も無視することはできず、難しい問題が多く残っている。

## 西武線沿線の市街地形成に関する考察

### 一 東村山市を中心として一

中山 晴 美

国鉄中央線をはじめ都心副都心と連結する私鉄沿線の近郊地域は、高度経済政策に伴う東京への人口集中の圧力を多く受けてきた。東村山市を含めた西武新宿線・池袋線の近郊地域も都心から20～30 Km 圏内で交通の便も良いことから首都圏住宅都市として好適地にあり、ドーナツ化現象によって住宅地を求め激しい集中が見られた地域である。同時にその地域性も急激な変貌を遂げてきたことは言うまでもない。本論文は、そうした地域の変貌と現状を東村山市という行政単位に限られることなく、西武線沿線地域の中でとらえ、考察することを目的とした。

本論文の枠組としては、まず第一章で地域の概説を述べた上で、第二章で時代的・地域的な人口の分析、その人口増加と平行する宅地化の進展、そして形成された市街地の住宅地としての性格を住民・住居形態・緑地の面から考察した。また第三章では、急激な人口の増加と市街化の進展とともに発展してきた商業活動をとりあげ、西武線沿線の商業の変化と三多摩における位置づけをした後、東村山市の商店街を統計資料と実地調査から分析し、最後の第四章に全体のまとめを行なった。

西武線沿線地域は平均すると昭和25年ごろから人口急増の兆候が現われ、30年代を急増期、40年代を鈍化期と時代区分されるが、各時代を通じて中央線や京王線沿線の近郊地域より高い増加率を示している。こうした人口の激増と人口集中地区の拡大は当地域の地理的条件から見て当然ではあるが、その契機となったのは都営住宅や住宅公団・公社等の公的住宅の進出であった。これらは比較的都心に近く交通の便も良い上、当時地価の安かった昭和30年代を中心に建設された。公的住宅はそれ自体が多く的人口を吸収するだけでなく、その進出によって農地の転用や住宅環境の整備が促進され、一般住宅や民間集団住宅・社宅等の建設も盛んになり地域発展のきっかけとなったのである。しかし40年代になると地価の高騰や用地確保の面から住宅全般の増加が鈍り、それまで社会増によってもたらされていた人口激増が、自然増による人口漸増へと変わってきた。以上のような住宅地への変貌は、核家族化・学歴の向上・第1次産業の衰退を導き、区部のベッドタウンとしての性格を強める一方、東村山市等は30 Km 圏という地理的位置から近隣の中心地や埼玉県とのつながりも少なくない。

他地域への依存度が強いのは通勤・通学だけでなく、商業についても同様である。当地域内では田無市だけが他市からの購買力の流入が見られるが、田無市以外では副都心や立川・所沢などへの流出がかなり多い。そうした商業の実態をつかむために東村山市の21の商店街を商店街規模と業種構成により分類し、分類別にその性格を分析してみた。しかし、東村山市の商業全体が結局は住宅環境の一部として発展してきたため、分類ごとの明確な相違は現れなかった。つまり商圈は狭く日常生活を充足させる程度の商店街がほとんどではあるが、ほぼ全市域を商圈とし、より多様な買回品をも充足させる核的な商店街も久米川駅の周辺に存在して、やや立体的な商業環境を形づくっていると言える。

## 佐賀平野北西部の農業地理学的考察

羽 田 京 子

私が、地理学の中で特に農業地理学分野を卒論の対象の中心にしたのは、社会的な農業の地位の低下に興味をひかれていたという前提によっている。日本の社会情勢が含む問題の中で、農業についてはそれが人間の生活に不可欠の産業であるのに、行政面で立ち遅れ、近代的産業としての体系をなかなか取得できないでいる事は、農村に生活したことのない私にとっても心配事であった訳である。現在自宅が福岡にあるので、日本では先進地域に入る佐賀平野を、地の利を生かしてフィールドに決定した。

佐賀平野の農業を考えると、まづ農業用水は、意外に筑後川ではなく中河川嘉瀬川に依るところが多い。幸い佐賀平野については数々の研究があり、この嘉瀬川の作る扇状地の農業を、以南の筑後川の氾濫原と比較しながら明確にし、土地の環境が農業の経営にどんな影響を与えるのか—その一端を明らかにしてみようというのが、卒論の目的である。

調査にあたって、文献は教室で入手できるものと、佐賀県立図書館郷土資料室に入っているもの、及び地元の出版社からの研究書を主に使用し、県庁・市役所・農協等での話と地元の郷土研究家の人々の話・フィールドでの聞き取り調査を参考にして、統計を処理した。

次に卒論の要旨を述べてみる。

フィールドは題目が示すように佐賀平野の北西部で、背後の山地と筑後川の氾濫原の中間地域である嘉瀬川の扇状地及び山麓を占めている。南の氾濫原は、土地が平坦で、水利施設も整い、大型機械導入の圃場整備が進んでいて、特に稲作の近代化に意欲的で、全国でも有数の高生産力地域—土地生産性・労働生産性とも—を形成している。これに対し、佐賀平野として一括して述べられているが、フィールドは、平野内後進地域に属している。地形は移行部であるために傾斜があって圃場整備しにくいし、土壌は粘土質の氾濫原に比して扇状地性で生産力が劣っている。又、灌漑用水は、地形を利用して佐賀平野への取水・配水施設の建設地ではあるが、フィールド自身がその恩恵を受けることが少なく、現在進行中の水利事業の完成を待っているような地域である。このような環境の違いを考慮して農業経営の状態を比較してみると、水田が小規模で、機械化も遅れ、生産力の低いフィールドの農家は、最近特に成長した佐賀市の都市機能への兼業—特に第二種兼業を余儀なくされているのに対し、